

36	徳島県立海部高等学校	全日制	普通科	26～28
----	------------	-----	-----	-------

平成26年度 高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

高等学校に在籍する障害のある生徒の自立と社会参加を図るため、特別支援学校や発達障がい者総合支援センター等の関係機関と連携し、自立活動を取り入れた特別の教育課程の編成及び得意分野を伸ばす指導及び就業体験等の実施による進路支援の充実に関する研究。

2 研究の概要

生徒の実態把握を踏まえ、運営指導委員会での協議から、来年度の新たな教育課程の方向性を決めていった。本校で特別な支援の対象となる生徒は、周囲とのコミュニケーション等対人関係の困難さを示す場合が多いことから、来年度からは自立活動の「人間関係の形成」や「コミュニケーション」「心理的安定」に重点をおいた指導を中心に、2単位時間（年間70時間）を新たな教育課程として編成することとした。また、週時程内に1時間残り1時間は長期休業中に事業所見学や就職面接会、就業体験等を半日から1日単位で実施することにより、体験的な学びの場を用意することとした。

今年度は、個々の生徒について特別支援学校、発達障がい者総合支援センター等の協力を得ながら、校内での実態把握を元に個別の指導計画等を作成し、個別の支援や評価方法を特別支援学校の巡回相談員や校外運営指導委員に授業参観やVTR等で見てもらうことで、個別の指導計画作成の手がかりとした。そして、就職対策講座や「プレ通級（仮通級）」を行うことで来年度の自立活動の授業となる「キャリアデザイン」の指導内容の参考にした。

また、学習場面において複数の指示を聞くことが難しく、周囲の状況把握に困難を示す生徒に対しては、一斉授業での板書や指示の工夫を行うとともに、特別支援教育指導補助員による個別支援等を行ったり、非常勤講師による習熟度別授業を展開したり、教科指導をとおして個々の能力を伸ばす指導を実施した。さらに、関係機関と連携し、卒業後を見据えた職業評価や就業体験等を実施できるよう、運営指導委員らに助言をいただきながら適切な支援方法について研究を行った。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究開始時の状況と研究の目的

本校は徳島県南部の高校で、普通科、情報ビジネス科、数理科学科を持ち、1学年の生徒数が約140名、総生徒数400名あまりの中規模校である。普通科のある高校が周辺にはないため、地元の生徒のほとんどが本校に進学する。このため、毎年、生徒の学力には大きな差があり、特別な支援を必要とする生徒が各学年に複数名在籍している状況が見られる。生徒の中には、障がい等の特性のため、対人関係がうまくとれず、コミュニケーション能力も未熟なため集団にとけ込めずに自尊感情が低下したり、通常の一斉授業に適応できず、学力不振に陥ったりする生徒もいる。いずれも従来の教育課程や教育方法では、本来持っている能力を十分に発揮できないことから、障がい特性に応

じた教育課程の見直しによる個別指導や小集団でのコミュニケーションスキルの獲得、基礎学力の向上、一斉指導の中での個々の能力や特性に応じた支援の充実等、生徒に応じた教育環境の整備を図ることが喫緊の課題となっている。本年度行った生徒の実態調査でも、友人関係の持ち方が下手で孤立しやすかったり、片付けが苦手な忘れ物等が多かったりという「社会性」に関する部分や、読み飛ばしや読み間違いが多く、板書を写すのに極端に時間がかかったり、一度に複数の指示が聞き取れず混乱したりするといった「読む」「書く」「聞く」といった学習スキルに関する部分が生徒の課題として挙がってきた。これらを踏まえ、特別支援学校の自立活動の内容のうちで特に「人間関係の形成」「コミュニケーション」「心理的な安定」に重点をおき、個々の生徒の障がい特性等に応じた学習支援や生活支援を行うことで、生徒の学習上又は生活上の困難の改善や克服をめざすとともに個々の能力・才能をのばし、将来の自立と社会参加へつなげることを研究の目的とした。

(2) 研究仮説

障がい等の特性のため対人関係がうまくとれず、コミュニケーション能力も乏しく集団に溶け込めず自尊感情が低下し、本来の能力が発揮できない生徒に対して、新たな教育課程の中に、特別支援学校の「自立活動」領域の区分である「コミュニケーション」「人間関係の形成」及び「心理的安定」に重点をおいた「キャリアデザイン」を2単位時間設定することで、本来持っている能力を発揮し、学力だけでなく社会性、コミュニケーション能力を向上させることが期待できる。また、「キャリアデザイン」を週時程内に1単位時間、週時程外に1単位時間設定し、週時程外については、長期休業中に就業体験や模擬面接会等を半日から1日単位で実施することにより、体験的な学びの場の中で、将来の社会生活や職業人として必要な社会性やコミュニケーションスキルを身につけることが期待できる。そして、今まで十分でなかった学習についても「キャリアデザイン」の指導と関連づけて、丁寧に聞き取り自分の言葉で発言する機会を多く持つことで基礎的な学力が向上し、自信を持って学校生活を送ることが期待できる。

(3) 教育課程の特例（本年度は未実施）

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年次で「キャリアデザインA」を3年次で「キャリアデザインB」の授業を新たな教育課程として設定する。この授業は選択制の為受講生は一般の生徒より単位増となる。 ・ 週時程の中で行うのは1単位時間。残りの1単位時間は長期休業中に行う事業所見学や就業体験、模擬面接会等にあてるため半日から1日ごとのまとめ取りをする予定である。これは本校の支援の必要な生徒の多くが受け身でコミュニケーション能力 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小集団の中で、自分やクラスメイトの得意なこと苦手なことをインタビューして紹介する「他者紹介」やストレスマネジメント、「事業所見学」や「就業体験」等を通して、自分の適性に合った職業選択を考えたりする時間を設け、自分や相手の良さを知り、認められ 	2年次……2単位 (年間70時間) 3年次……2単位 (年間70時間)

に乏しいこと、それに加えて就職希望が多いことから、なるべく就労に備えた実践を取り入れた自立活動の学習をめざしているからである。	るという安心感の元にコミュニケーション能力を高める学習を行う。
---	---------------------------------

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

○教材等の工夫

- ・ スケジュールやタイマーの活用で視覚的に授業の流れを示した。
- ・ 地理では、付箋を使って地図の学習を行った。
- ・ プロジェクターやICTを活用した。
- ・ 書くのに時間がかかる生徒に配慮し、プリントを書き込み式にした。
- ・ 数学では、確率の学習において、実際にサイコロ、割り箸、コイン等を使って一覧表にまとめたり、関数ではGrapes（数学用ソフト）で紹介したり、図形と方程式では色画用紙等で図形を示したりと身近な生活に即した事例を取り入れた。

○授業形態

- ・ 生徒の理解の状況に応じて習熟度別授業やチームティーチングを設定した。
- ・ 集中することが苦手な生徒や板書が見えにくい生徒に対する座席の工夫を行った。
- ・ ペア学習、チーム学習、グループ学習等小集団での活動の場を増やした。
- ・ ピアサポートを授業で実践できないかと考え、班別学習を導入し、生徒同士がお互いに教え合う場を増やした。

○指導法

- ・ 生徒が集中して活動できるように、音楽等の実技練習は検定方式で行った。
- ・ 生徒が受け身にならないよう、生徒の活動や演習の時間を多くとった。
- ・ 板書においてはノートの見開きと同じ配置になるよう内容の精選を行った。
- ・ 指示が明確になるよう、指さしをしながら、教科書本文の提示を行った。
- ・ グループ学習では、司会・記録・発表など役割を明確にした。
- ・ 教員が生徒に発問するとき、クイズ形式で質問し、個々がミニホワイトボードに回答したり、全員が授業に参加しやすいように赤青カードを使う等生徒自身が自分の意見を表明しやすく授業者も個々の生徒の理解の程度を把握しやすくした。

(5) 研究成果の評価方法

- ・ 障がい等の状態に応じた特別の指導、個々の能力・才能を伸ばす指導について、それぞれ教員へのアンケートの実施した。
- ・ 授業を受けた生徒への聞き取りやアンケートによる評価を行った。
- ・ 個別の指導計画を作成し、目標に対する評価等を行った。

4 研究の経過等（平成26年度は「キャリアデザイン」未実施）

(1) 教育課程の内容

平成27年度に実施予定の「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」の年間指導計画では、小集団の中で、自分やクラスメイトの得意なこと、苦手なことをインタビューして紹介する「他者紹介」やストレスマネジメントについて学んだり、事業所体験等を通して、自分の適性に合った職業選択を考えたりする時間を設けることで、小集団の

中で自分や相手の良さを知り、認められるという安心感の中、集団の中で積極的にコミュニケーションをとる素地を養っていききたい。

(2) 全課程の修了認定の要件

今年度の運営指導委員会や校内での協議の中では、この「教育課程の特例」による「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」の授業が、他の生徒が履修する単位よりも多くなるという点、そして、内容が本人の障がい特性に応じて、将来の社会参加や自立を目的としている点等から、卒業単位に含めることは、授業選択生徒にとって負担増になるという意見が出ており、現段階では、卒業単位には含めないという方針である。

(3) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な教育課程の編成準備 ・校内支援体制の機能強化 ・生徒の現状及び課題の把握
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な教育課程の実施 ・生徒の支援の充実 ・校内支援体制の充実
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な教育課程の評価・検証 ・生徒の支援の評価・検証 ・校内支援体制の評価・検証

(4) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な教育課程の編成準備について ・校内支援体制の機能強化について ・生徒の現状及び課題の把握について
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な教育課程の実施について ・生徒の支援の充実について ・校内支援体制の充実について
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な教育課程の評価・検証について ・生徒の支援の評価・検証について ・校内支援体制の評価・検証について

◎ 1年次の研究の経過及び評価に関する取組については以下のとおりである。

月	研究内容(事業内容)	評価(事業の成果)
4月	<ul style="list-style-type: none"> ●校内支援体制について協議 ●生徒の実態把握として「学校生活チェックリスト」を全教員に配布し、回収。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「学校生活チェックリスト」を全教員に配付する

	<ul style="list-style-type: none"> ●保護者向けリーフレットを作成した。 ●情報収集 ●特別支援教育指導補助員が加わり、授業観察を行い支援の必要な生徒の情報収集を始めた。その上で、先に行った「学校生活チェックリスト」と合わせて、どこのクラス、授業に支援に入ってもらうかを協議した。 	<p>ことで、校内の支援体制整備と教員の特別支援教育に関する理解を深めることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●特別支援教育指導補助員を配置することで全学級での授業観察を行い、支援の必要な生徒の情報収集ができた。
5月	<ul style="list-style-type: none"> ●PTA総会で保護者向けリーフレット「海部高校の特別支援教育」を配布し、本校での特別支援教育の取組について説明した。(10日) ●英語の非常勤講師が加わり、ティームティーチングや習熟度別授業を展開した。 ●「学校生活チェックリスト」の整理とまとめを行った。困っている点や課題についてチェック項目を確認するだけでなく、個々の生徒に対しての具体的な対応策もまとめた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「海部高校の特別支援教育」についてのリーフレットを作成し、PTA総会で配付することで保護者への啓発につなげることができた。 ●非常勤講師を配置することで、英語学習で支援の必要な生徒に対して少人数での丁寧な指導を行うことができた。 ●「学校生活チェックリスト」を行うことで、実態の把握と個々の生徒への支援の方向性(対応策)をまとめることができた。また本校全体の傾向も明らかになった。
6月	<ul style="list-style-type: none"> ●阿南支援学校ひわさ分校の巡回相談員に来てもらい、授業参観をしてもらった。(23日) ●第1回運営指導委員会(23日) <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態について ・教育課程について ・今後の取り組みについて 	<ul style="list-style-type: none"> ●巡回相談員に授業観察してもらうことで、客観的意見を取り入れて生徒の実態把握ができた。 ●校外の運営指導委員から意見をいただくことで、今後の取組の方向性を明確にすることができた。
7月	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員研修を実施した。(7日) 講師：徳島県教育委員会特別支援教育課 濱紀子 指導主事 <ul style="list-style-type: none"> ・事業説明 ・気になる生徒と具体的な対応策について ●第1回就職対策講座 「就職に必要なビジネスマナーを身につけよう」 (普通科3年生就職希望者対象)を実施した。 (17日) 講師：テルウェル西日本チーフインストラクター 祁答院 千秋先生 →生徒アンケート実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員研修の中で、本事業説明を行い共通理解を図ることができた。また「学校生活チェックリスト」の集計を元に、気になる生徒への具体的な対応策を提示し、教職員の共通理解を図ることができた。 ●事前の実態把握で、支援の必要な生徒の多くが就職を希望していることがわかったため、支援の一つとして本講座を開いた。また、受講生のアンケート結果からニーズが明確になり、来年度の新

	<ul style="list-style-type: none"> ●文部科学省での連絡協議会に参加（22日） ●3年生就職対策補習（23日24日） 就職対策補習の中で、事前に行った「就職対策講座」の内容の振り返りを行うとともに、受講した生徒に対してアンケートを実施した。 ●生徒・保護者へ来年度の教育課程（キャリアデザイン）について、三者面談時に説明を行った。 	<p>たな教育課程編成の参考になった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●補習で「就職対策講座」の内容の振り返りを行うことで、マナーや言葉遣いについてはトレーニングが効果的であることが確認できた。 ●三者面談時に支援の必要な生徒に対しては個別に丁寧な説明を行うことができた。
8月	<ul style="list-style-type: none"> ●第2回就職対策講座（26日） 「就職試験目前 落ち着いて面接に臨むために」（普通科3年生就職希望者対象）を実施した。 講師：テルウェル西日本チーフインストラクター 祁答院 千秋先生 ・面接練習の体験、評価 → 生徒アンケート実施 ●「特別支援教育指導補助員」「非常勤講師」に、「徳島県発達障がい教育研究会」に参加してもらい、県内の高等学校での特別支援教育の取組や県外講師の講演を聞き、研修してもらった。（28日） 	<ul style="list-style-type: none"> ●9月からの就職試験に向けての直前講座を開催することにより、コミュニケーションが苦手な生徒にとっては、事前の練習として効果があった。また、生徒のアンケート結果からもニーズが高いことが確認できた。 ●個別の生徒の支援にあたる2名に研修してもらうことで、特別支援教育に関する理解が深まった。
9月	<ul style="list-style-type: none"> ●個別の指導計画の作成を開始。 担任・教科担任と協力して「個別の指導計画」を作成し、支援の充実を図った。 ●第2回運営指導委員会（26日） <ul style="list-style-type: none"> ・校外運営指導委員による授業見学 ・文部科学省での連絡協議会についての報告 ・次年度の新たな教育課程について ●県教委へ教育課程の提出 	<ul style="list-style-type: none"> ●「個別の指導計画」の作成により指導の方向性が明確になった。 ●授業参観や協議により、本校生徒の実態や課題が明確になった。また来年度の教育課程や「自立活動」の内容について運営指導委員からいただいた意見を計画に反映させることができた。
10月	<ul style="list-style-type: none"> ●県外先進校視察（20日） 大阪府立岬高等学校（教育相談課員4名、指導主事） ●来年度「キャリアデザイン」教材準備・指導案作成等を開始（～2月） 	<ul style="list-style-type: none"> ●他校の進んだ取組から本校の実践に役立つ情報を得ることができた。 ●来年度の内容について校外運営指導委員の助言の元、指導案等を作成することができた。
11月	<ul style="list-style-type: none"> ●阿南市立富岡小学校通級指導教室授業参観 阿南市立第一中学校通級指導教室授業参観（12日） 	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校と中学校の通級指導教室を参観することで、義務教育段階での通級指導教室の在り方について知るとともに、来年度の事業環境整備等へのヒントを得た。

12月	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員研修（12日） （講師：鳴門教育大学 井上とも子先生） ・「高等学校における特別支援教育」 ・ワークショップ 「海部高校生につけたい力」 ●「第2回徳島県発達障がい教育研究会」にて、県外の研究指定校3校と情報交換を行った。（19日） ・大阪府立岬高等学校 ・佐賀県立太良高等学校 ・岡山県立御津高等学校 ●平成26年度自己評価書・平成27年度計画書等を文部科学省に提出 	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員研修を行うことで海部高校の生徒の課題が明らかとなり、また伸ばしたい力や付けたい力を教員が協議することで支援の方向性を明確にし、共通理解を図ることができた。 ●同事業の研究指定校3校と情報交換を行うことで、事業の進め方や課題に対してのヒントを得ることができた。
1月	<ul style="list-style-type: none"> ●文部科学省での研究協議会（19日） ●来年度キャリアデザイン受講者向けオリエンテーション（プレ通級1回目）（28日） 	<ul style="list-style-type: none"> ●受講予定者にオリエンテーションを行うことで、個々の生徒の新しい授業に対する期待等を把握することができた。
2月	<ul style="list-style-type: none"> ●「学校生活チェックリスト」を全教員に配布し、記入後回収。（2回目） ●岡山県立御津高等学校来校。情報交換。（3日） ●来年度キャリアデザイン受講者講座（プレ通級2回目）（18日） 「社会人になるための力」 講師：テルウェル西日本チーフインストラクター 祁答院 千秋先生 ●みなと高等学園と発達障がい者総合支援センターとWeb会議で事例検討会を行った。（27日） 	<ul style="list-style-type: none"> ●今年度2回目の「学校生活チェックリスト」を実施することで、来年度も支援の必要な生徒について教職員間で共通理解を図り、引き継ぎの資料とすることができた。 ●プレ通級を行うことで、社会で自立するために必要な力とは何か、生徒自身に問いかけるきっかけとなった。 ●Web会議を開催することで個々の生徒の事例についての相談体制を構築することができた。
3月	<ul style="list-style-type: none"> ●第3回運営指導委員会（4日） ・平成26年度の事業内容等について ・平成27年度の事業計画について ●平成26年度報告書の提出 ●来年度キャリアデザイン受講者プレ通級（プレ通級3～4回目）（13日16日） 「自分を知る（レディネステスト）」 ●入学予定者のいる中学校への引き継ぎ依頼と引き継ぎ 	<ul style="list-style-type: none"> ●校外運営指導委員会の先生方から今年度の取組についての評価をいただくとともに、次年度の計画についての留意点もご助言いただき、報告書や今後の取組に反映させた。 ●レディネステストの実施により個々の生徒の実態把握ができ、「個別の指導計画」作成のヒントにすることができた。 ●中学校との引き継ぎにより入学前に支援の準備をすることができた。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 対象生徒への効果

<「キャリアデザイン」を見据えた就職対策講座>

○知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力、学ぶ意欲などを含めた学力

・事前に想定していた内容以外で質問されると、最初はとまどい、返答できずにいたが、講座後には面接のポイントが理解でき、自ら意欲的に面接練習を申し出る等、努力する姿が見られるようになった。

○自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

・身だしなみの大切さ、社会人としてのマナーを学習したことで、自分の姿を客観的にとらえ、自分を律する機会になった。

○たくましく生きるための健康や体力

・欠席や遅刻があると社会人として信用がなくなることを念頭におき、自己の健康管理に気をつけた。

○人間関係（生徒間、生徒と教師間）

・自分から挨拶のできなかった生徒が、講座をきっかけに挨拶の重要性を実感し、少しずつ挨拶に慣れ、小さい声ではあるが自分から挨拶できるようになった。

○学校生活や学習についての意欲・積極性・満足感・自信

・係の仕事をおこなすことによって、自分の役割が明確に把握でき、その仕事については自分から教師に話しかけたり、自信を持ってできるようになった。

○生徒の学習上の負担

・今年度は負担になるほどの回数行わなかった。

<少人数選択授業（書道）>

○知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力、学ぶ意欲などを含めた学力

・少人数のため意見を求められたり発表があたったりする機会も多く、人前で話せなかった生徒も少しずつ授業環境に慣れリラックスして返答する様子が見られた。

○自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

・言葉でのやりとりがほとんど無かった生徒が、少人数の授業のため、他の生徒がいても安心して授業に参加できるようになり、こちらの問いかけに対して頷いたり、笑顔を見せたりするようになった。

○たくましく生きるための健康や体力

・健康面や体力面には問題ない。

○人間関係（生徒間、生徒と教師間）

・生徒数が多い一斉授業では、特別支援教育指導補助員等がT2として授業に入った際に対象生徒への距離感が難しい。距離が近すぎると他の生徒の目が気になったり、プライドが邪魔をしたりして拒絶してしまう場合があった。反面、少人数の選択授業では、対象生徒が安心して支援を受け入れることができていた。T2の特別支援教育指導補助員とも自然に会話できる場面が見られるようになり、また今まで友達や教員と会話することがなかったが、2学期初め頃から、下級生と楽しそうに昼食をとる姿が見られる等変化があった。

- 学校生活や学習についての意欲・積極性・満足感・自信
 - ・授業で役割を与えられたことにより、その責任を果たすことで、その仕事に関して自信を持って行動できるようになってきた。
- 生徒の学習上の負担
 - ・少人数での学習で落ち着いて学習できる環境であったため負担は少なかった。
- ② 教員への効果
 - 生徒への理解
 - ・学校生活チェックリスト等の実施により発達障がい等の特性からくる人間関係づくりの困難さや集中して学習に取り組むことが苦手な生徒に対しての理解が高まってきた。
 - 指導方法等の改善・工夫
 - ・生徒の実態や興味・関心に配慮し、生徒の活動時間を増やしたり、付箋や色チョークで全員がわかりやすいユニバーサルデザインを意識した授業をしたりする等の工夫やティームティーチングや習熟度別授業、ICTを取り入れた授業を行った。また、教職員研修で学んだ気になる生徒への効果的な声かけも取りながら授業を行った。
 - 教員の教育実践への意欲・自信・満足感
 - ・教職員研修を重ねることによって、普段の学校生活などで気になる生徒への対応や、高等学校における特別支援教育について理解を深めることができた。研修後には、授業等で関わっている生徒への対応について、多くの質問が出されその後のそれぞれの教員の教育活動にも広がりが見られた。
 - 教員間の連携・協力
 - ・就職対策講座では就職課、3年学年団と連携し、教育課程の編成では教務課と連携した。また、選択授業の書道においては、教科担任と特別支援教育補助員が上手く連携することができ、生徒の行動にも変化が見られた。
 - 教職員研修への意欲
 - ・研修会に意欲的であるかというすべての教員がそうではない。学びたいという思いはあっても日々抱える仕事が多く、時間的に厳しく、研修会への全員参加も難しかった。しかし、研修を重ねることで特別支援教育に関する教職員の理解も深まり、質問も多く出されるようになってきており、意欲的に取り組む教員が増えてきた。
- ③ 保護者等への効果
 - (保護者)
 - ・ティームティーチングや習熟度別授業に関して「ありがたい」という意見が多く聞かれた。また、リーフレットを配り、本校での特別支援教育の取組について保護者説明を行ったところ、クラス担任との面談で発達障がいを打ち明ける保護者も数名出てきた。しかし、先にも述べたとおり、特別支援教育は「特別なもの」という意識はまだまだ根強い。特別支援教育は全ての子どもたちにとって必要な教育であり、高校でもますます推進していくということを今後も伝えていきたい。
 - (他の生徒)
 - ・障がいの有無に関わらず、他者とのコミュニケーションを苦手とする生徒が多く次年度開講する「キャリアデザイン」について興味を示し、自分自身に必要な

だと感じて受講を希望する生徒が多くいた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

<問題となった点>

- ア 対象生徒をどのように絞り、本人や保護者にどのように話をすすめるか。
- イ 教育課程をどのように編成するか。
- ウ 授業の細かな内容、教材の選定。
- エ 高等学校の一斉授業でのT2の役割。特に特別支援教育指導補助員がどこまで関わるか。(対象生徒との距離感や質問された場合の対応等)
- オ T1とT2の打ち合わせの時間が取れず、授業の準備が十分に確保できないこと。
- カ 普通科の生徒が対象であったり、特別支援教育に対して「特別なもの」と考える保護者等の反応を気にして、最初は学校全体で取り組むことが難しかった。

<対応策>

- ア チェックシートを用いた実態把握。担任との面談。
- イ 現行の教育課程に2単位追加。事業所見学は長期休業中に週時定外でまとめて受講するような計画を立てた。
- ウ 外部講師を招聘し、専門的に且つきめ細かな指導。ICT機器を用いて自分の活動の様子を振り返り学習する。
- エ 対象生徒の自尊感情や実態、クラス環境を考えて、特別支援教育指導補助員等の入る授業を決定する。
- オ T1とT2の役割分担を明確にし、気づいたことを互いにメモし交換する。
- カ 本校の実態にあった研修を計画したり、すぐに取り入れることができそうな支援方法を紹介したりする。また、担当者のいる教育相談課だけでなく他の課とも連携を強化する。

<今後の課題>

- ・新たな教育課程がスタートしてから授業の打ち合わせ等の時間が確保できるか。
- ・「キャリアデザイン」を受講して欲しい生徒がいたが、本人や保護者から希望がなかった。また、支援を受けることを嫌がる場合どのように支援を進めていくか。
- ・「指導要録」や「調査書」への記載の仕方等をどのようにするか。
- ・年に3回行っている悩みアンケートに「勉強の仕方がわからない」「自分の進む方向がわからない」という意見が多かった。自分自身の事を理解し、自分に適した進路を考えていけるようにサポートしていく必要がある。1年生で行う「総合的な学習の時間」等を使い、学校全体で取り組んでいかなければならない。

第3回運営指導員の先生方からの助言

- ・新たな教育課程では子どもたちが自分たち自身で企画する内容も必要でないか。
- ・「キャリアデザイン」を受講して欲しい生徒に受講をすすめるにあたって、言葉だけの説明ではなく、写真や絵、またタブレット端末などを使ってイメージしやすいように工夫が必要である。
- ・生徒の困り感がわかるようなアンケートを実施することも必要である。